

知見の囿炉裏端

ボート競技とのご縁



技術経営士の会 坂田 東一



(ボート競技とは何か)

今回は、技術ではなく、ボート競技のことを紹介したい。ボート競技といっても競艇のことではなく、人力でボートを漕いで2000mの順位を競うスポーツのことである。

漕ぐ艇にはいくつか種類がある。まず、漕手の数は、1人、2人、4人、8人の各艇がある。このうち、1人漕ぎは両手に1本ずつオールを持つスカルというタイプになるが、2人漕ぎと4人漕ぎは、漕手がオールを両手に1本ずつ持つスカルというタイプと一人が両手で1本ずつ左右交互に持つスイープというタイプの2種類に分かれる。8人漕ぎはスイープタイプのみである。2人漕ぎスカルには舵手はいないが、2人漕ぎのスイープと4人漕ぎのスカルとスイープには舵手無しと舵手付きの種類がある。8人漕ぎ（エイトと呼ぶ）は常に舵手付きである。

スピードはエイトが一番速く、世界一のクルーになると2000mを5分10秒代で漕ぐ。時速23km弱くらいである。ボートの華は、エイトと言われる。

(ボート競技との出会い)

私がこのボート競技と出会ったのは、ほとんど偶然であった。大学に入学した1968年4月、その日キャンパス内を歩いていると、ちょっとごっつい上級生が寄ってきて、今日はボート部の新入生歓迎コンパがあるから、飲んで食っていかないと誘われた。しかも、部に入らなくてもいいと念押しされた。

ちょっと迷ったが、腹をすかせた貧乏学生は食べ物に弱い。言葉を信じてキャンパス内の会場に行くと食べ物とアルコールが盛沢山あり、威勢のよいユニークなOBも大勢参加し、いかにボートが魅力あるスポーツか、精進次第で全日本選手権に優勝もできると激を飛ばした。新入生も40名近く集まり、場は盛り上がり、すっかり雰囲気飲み込まれ、その雰囲気引きずられたまま、気が付いたら翌日練習に参加していた。

これがボートを漕ぐことになった始まりである。

(ボート競技を続けた動機)

当時、学内の寮に住んでいたが、全国にも広がった大学紛争が本格化し、学生による全学ストライキに突入、一部建物も学生セクトに占拠され、6月からは授業がなくなり、大学は事実上封鎖状態になった。この状態は翌69年4月まで続いた。そのため、埼玉の戸田にあるボート部の合宿所（艇庫）に引っ越し、7月からそこで暮らすことを決心した。最大の利点は下宿代が不要なことだ。当時やれることは、毎日午後仲間とボートの練習をすることくらいだった。しかし、授業のない中途半端な学生生活の中で、秋以降もボートを続けるのがいいかどうか迷っていた。

そんな時、卒業まで続ける決意をさせる出来事が起こった。6月末にあった全日本選手権だ。わが校のボート部の対校エイトクルー（一軍選手）は準決勝で敗退したが、決勝では同志社大学クルーが、力強い迫力のある漕ぎで優勝し、メキシコ五輪（1968年）への出場を決めた。見た目も8本のオール動きが揃った大変美しいクルーだった。これを受けて開催されたわが校合宿所での反省会で、当時の監督は強調した。「同志社は、わが校漕法の良さを実現している」と。その時、「わが校漕法なるものがあるのか？それなら、それがどんなものか知りたい！」という思いが沸々と沸き上がってきた。それが卒業まで、ボートを続ける動機になった。

それから3年が経過、4年生になった1971年、私の乗ったエイトクルーは春先から各校と競漕しても一度も負けることがなく、本番の8月末の全日本選手権で私立有力校を抑えて優勝した。8年振りの優勝だった。大先輩は、“エレガントな漕ぎ”だと評してくれた。

「わが校漕法」に近づいたクルーだったと思う。良き仲間にも恵まれた結果だが、私の青春期で唯一輝いた瞬間である。

(2020東京オリンピック・パラリンピックの結果)

このボートがご縁で、2021年1月から日本ボート協会（2023年から日本ローイング協会に名称変更）の会長を仰せつかっている。その一年前から話があったことであるが、当初は2020年の東京オリンピック・パラリンピックが終わってからの就任との前提だった。ところが、東京オリ・パラが2021年夏まで延期になり、てっきり私の就任も一年延期され2022年の1月になると思った。しかし、前任者の決断で予定通り2021年1月の交代となり、私にとっては、いきなりの東京オリ・パラである。急遽その運営を引き継ぐことになり、否応なく緊張感が増大した。

<全体運営>

競技会場は江東区に新設された海の森水上競技場である。まず2021年5月上旬にアジア・オセアニア大陸予選というのを開催しなければならなかった。そこで日本は男子一人漕ぎスカルと女子軽量級2人漕ぎスカルの2クルーが漸くオリンピック出場資格を得た。パラリンピックも女子一人漕ぎスカルと後から推薦で男女混合舵手付き4人漕ぎ（スイープ）が
出場資格を得られた。残念ながら今回は他の種目の出場資格を得るには至らなかった。

7月、8月のオリ・パラの時期は、丁度、コロナ感染が拡大し、緊急事態宣言下の時期と重なり、レース運営には協会のすべての関係者が細心の注意を払うことになった。無観客になったこと、選手の活動空間や移動空間をその他の人々の活動空間とは区別して管理する、
いわゆるバブル方式の採用などが功を奏し、コロナ感染のひどい拡大もなく、成功裡にオリ・パラボート競技を終了することができた。

結果、国際ボートコミュニティへの責任も果たせた。これには、日本政府、東京都、東京オリ・パラ組織委員会の運営支援、国際ボート連盟のリーダーシップ、わが日本ボート協会等からの多くのボランティアの尽力によるところが大きく、感謝の言葉しかない。

＜日本選手の成績＞

日本選手の成績は、女子の軽量級2人漕ぎスカルが10位、男子の一人漕ぎスカルは11位となり、8位入賞には届かなかったが、両種目の欧州の金メダルクルーとの差は10秒以内くらいにとどまり、国際的に競える手応えが得られ、次のパリ大会に向けて希望の持てる結果となった。パラリンピックの選手はまだ世界との差が大きく、選手層を厚くするところから始めなければならない。今回、2種目に出場できたことが、今後につながる成果である。

参考までに、東京オリンピックでメダルを取った国は欧米中心の16か国に限られたが、最多の5個を獲得したのは、ニュージーランド、オーストラリア、オランダ、ルーマニアで、アジアからは中国が3個取っている。

今アジアでの日本の実力は、中国に次いで2番目だろう。中国は身体の大きい選手を選抜し、国が特別の訓練をしている。欧米の強豪国の選手も、男子なら身長195cm くらいもあるから、体格的に劣る日本はハンディキャップがあり、体力、持久力、メンタルを鍛え、漕ぎを磨くことが何より重要になる。

（ボート競技普及の略史）

ボート競技は、18世紀に英国で発展し、1829年に初めて開催されたオックスフォード大学とケンブリッジ大学のレースは有名である。日本では19世紀の明治に入り、長崎、横浜、神戸に滞在した英国商人たちが始め、その後学生たちが対校レガッタを開催したことが、本格化の契機になり、今日につながっている。

日本漕艇協会（1998年までの名称、日本ボート協会の前身）は、1920年6月に設立され、日本のスポーツの統括団体としては最古の団体である。2020年、創立100周年を迎え、コロナ禍がなければ、東京オリ・パラの時期と重なるはずでもあった。日本ボート協会（当時、現日本ローイング協会）は、この100周年を契機に、新ビジョンを策定し、「すべての人にいつでもボートを漕ぐ機会を提供すること」を掲げ、全国に約60か所ある公認ボート場を利用し、一般市民参加の地域・市民レガッタなどの振興に一層努力していくことにしている。

（若者を育てるボート競技）

ボート競技は、今の日本ではメジャーとは言えないが、学生スポーツとしてはなお素晴らしいスポーツだと思う。彼らの目標は、全日本中学選手権、インターハイ、全日本学生選手権などになる。日々の練習では、クルーの仲間と目標を共有し、数か月単位の合宿を繰り返し、ともにチームのために全力を尽くし、心身のタフな状況に耐え抜かなければならない。他の集団スポーツとの違いは、エイトならば体格も体力も個性も異なる8人が“同じ瞬間”に“同じ動作”をして、クルーとしての一体感、ユニフォーミティを追求することだ。その意味で、いわば究極の集団スポーツとも言える。昔から、「一艇ありて一人無し」という。仲間を大事に想う心、仲間と協調・協力する意思、厳しい練習に耐える覚悟、それを支える克己心や自律心、ボートはそのような人間性を培う力がある。オアーズパーソンシップを涵養するのである。そんなボート競技にできるだけ多くの若者が親しんでくれるよう、全国の各県ボート協会等と連携し、ボート競技の一層の普及に取り組むことにしている。

本人の心身の健全な成長に役立つだけでなく、そういう若者が育って日本社会を支えてくれれば、日本の地域や社会の進歩・発展にも貢献してくれるだろうと信じている。